



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小児の発達アセスメントにおける弁別学習授業の課題
Author(s)	コリー, 紀代
Relation	日本小児看護学会第19回学術集会. 2009
Issue Date	2013-09-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53109
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	conference presentation
File Information	nihonshoni-19.pdf



小児の発達アセスメントにおける 弁別学習授業の課題

北海道大学大学院
保健科学研究所
コリー紀代

【はじめに】

- 成長発達のアセスメントは、小児看護に欠かせない技術の一つである。少子化の影響で小児科が閉鎖されていく中、短い実習期間を有効に使うためには、子どもとの接触機会の少ない学生であってもより多くの視点を持ち、子どもと関わることができるよう、実習以外にも子どもを観察する機会を提供することが必要と考えられる。
- そこで、本研究では、小児看護に関する講義において、弁別刺激として9ヶ月児の運動・言語的発達に関するビデオを使用し、アセスメントの視点について弁別訓練を実施し、その効果と課題について検討したので報告する。

【方法】

A大学2年次在学中の学生72名を対象に、小児の発達に関する講義（各90分）を4回実施した後、教科書付属のビデオによる弁別訓練の講義において、ビデオ視聴を3回提示した。1回目は、学生に講義の知識を利用するよう指示し、2回目には、教科書中の粗大運動、微細運動に注目するように説明した。3回目には、言語的能力や社会的発達にも注目するよう説明し、毎回ビデオ視聴後にアセスメントを記載してもらった。結果の分析には、SPSS Text Analysis for Surveysを用いた。

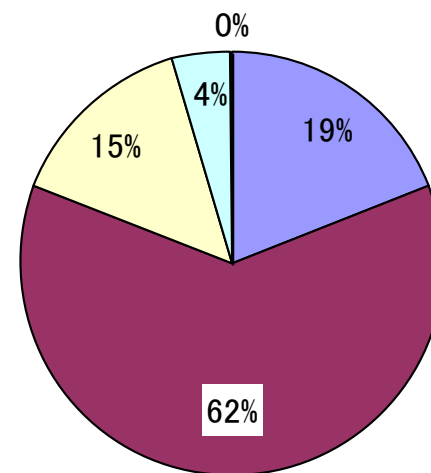
第1回	成長・発達の内容、影響要因
第2回	形態的成長と評価法
第3回	機能的発達と評価法
第4回	精神・社会的発達と評価法
第5回	成長・発達の評価法の実際 ビデオ視聴1回目(5分)ナレーションなし 記録(3分) 粗大運動、微細運動に注目するよう促す ビデオ視聴2回目(5分)ナレーションなし JDDST-Rと比較するよう指示する。 記録(12分)学生同士で話し合う 言語・社会的発達にも注目するよう促す ビデオ視聴3回目(5分)ナレーションあり 記録(5分) アンケートの記載 解説

図1. 研究の流れ

【結果】

- 72名中、68名(94.4%)から回答を得た。講義に対し「非常に効果的」とした者は13名、「効果的」とした者42名と合わせ、効果があつたとする者は55名(80.9%)であつた。反対に、「それほど効果はない」は10名、「全く効果はない」は3名であつた。
- 効果がなかつた学生の多くは、その理由に、「アセスメントとは何をしてよいかわからない」と回答していた。

グラフ1 学生の回答状況



- 非常に効果的
- 効果的
- それほど効果はない
- 全く効果はない
- わからない

次に、SPSSを用いて内容分類した結果、

〔考える機会となった〕

〔実施方法の優れた点と改善点〕

〔難しかった〕

〔わかりやすかった〕

〔視聴回数〕

〔ビデオの内容に関する提案〕

〔今後の学習への意欲〕

〔面白かった〕

〔視点が理解できた〕

〔赤ちゃんがかわいかった〕

〔実践的〕

〔今後も取り入れていって欲しい〕

〔真剣さが増した〕

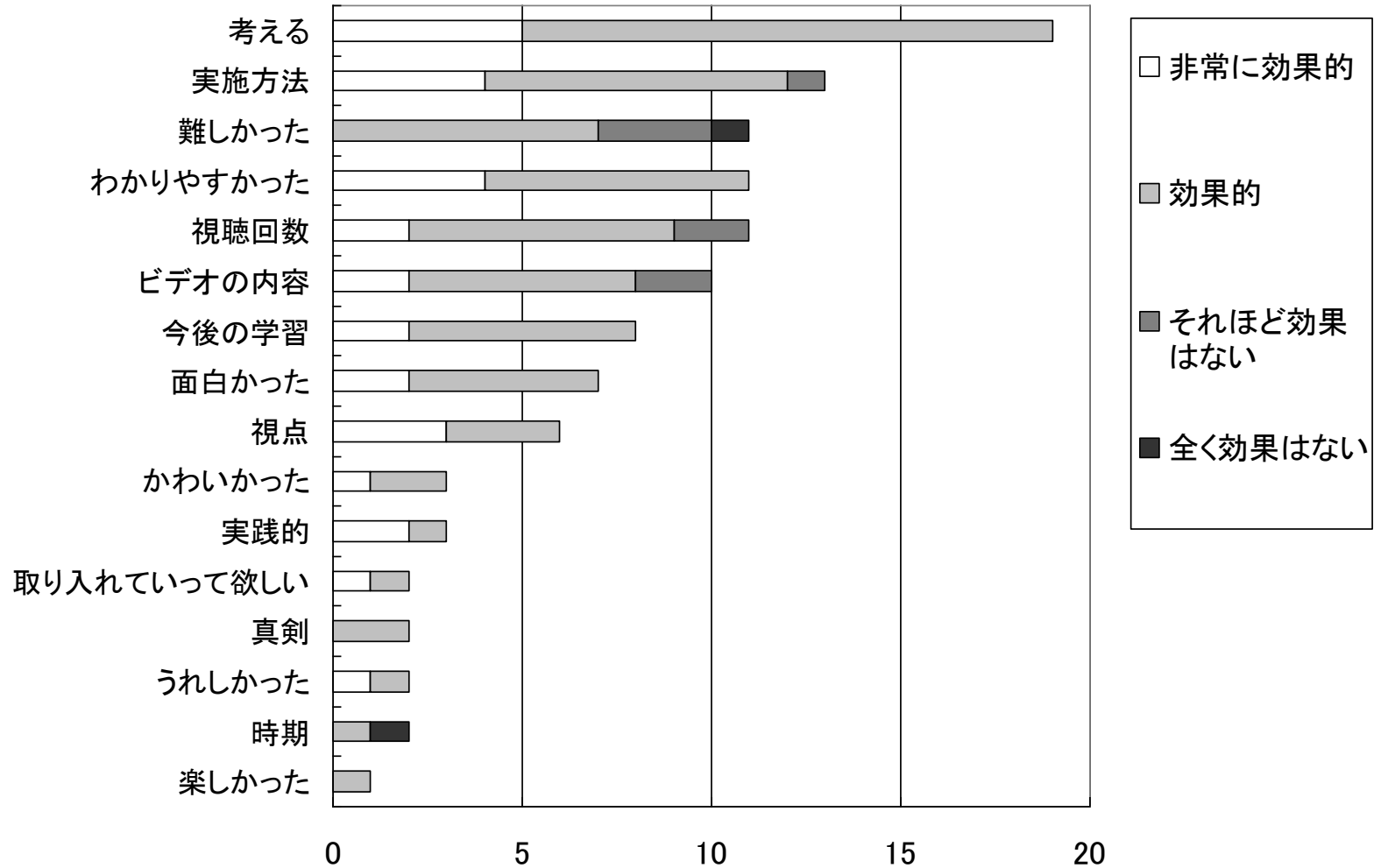
〔わかるようになりうれしかった〕

〔時期に関する提案〕

〔楽しかった〕

といった16カテゴリーが抽出された(図1)。

グラフ2. アンケート結果



【考察】

観察における言語化には、観察者自身によるモデリング刺激の言語化と、モデルが言語反応を行い、それが観察者の学習に影響を及ぼす場合の2つの場合がある(坂野、1978)。今回の講義では、学生に言語化の機会を提供し、教育者がモデルとなりアセスメントの実際を示す絶好の機会となっていた。また、覚えた知識を活用して考えることや、アセスメントには正常な成長発達を理解が必須であることを学生に実感させていた。

これにより、実習によらずともビデオによる弁別学習によって、学生が発達評価の視点を理解することの可能性が示唆された

【今後の課題】

但し、効果はないとした者も少数存在しており、今後の改善点として、アセスメントの定義を予め復習させ、ビデオの音量等、視聴覚教材の使用に関する配慮や、発達の遅れがある幼児を対象としたビデオ内容にする等の工夫が必要と考えられる。

【引用文献】

坂野雄二(1978)、観察学習におよぼすモデルの反応様式と観察者の言語化の効果、教育心理学研究 26(2)、66-74